

女客

泉鏡花

青空文庫

「謹さん、お手紙、」

と階子段はしごだんから声を掛けて、二階の六畳へ上り切らず、欄干てすりに

白やかな手をかけて、顔を斜ななめに覗のぞきながら、背後うしろむ向むきに机こに寄よつ

た当家あるじの主人あるじに、一枚もたを齎もたらした。

はぼか
「憚り、」

と身を横おほに、蔽おほうた燈ともしびを離はなれたので、玉ぎよくぼやを透すかした薄うすあか

りに、くつきり描いき出だされた、上り口あがりぐちの半身あおやは、雲あおやの絶間あおやの青あおや

柳ぎ見るよう、髪かたちも容かたちもすつきりした中年ちゆうどし増ま。

これはあるじの国許くにもとから、五ツになる男の児こを伴うて、この度上京、しばらくここに逗とまり留りゆうしている、お民といつて縁続き、一蔭あるまきえし絵師の女房である。

階下したで添乳そえちをしていたらしい、色はくすんだが艶つやのある、藍あいと紺たてしま、縦縞たてしまの南部あわせの袷くろじゆうす、黒縹くろじゆうす子の襟くろじゆうすのなり、ふつくりとした乳房しほの線、幅細くつろく寛くつろいで、昼夜帯あおみの暗いのに、緩まどく纏まとうた、縮緬ちりめんの扱しごき帯おびに蒼味あおみのかかったは、月の影かげのさしたよう。

燈火ともしびに対して、瞳清すずしゆう、鼻筋はなぢがすつと通り、口許くちもとの緊しまつた、瘦やせぎすな、眉まゆのきりりとした風采とりなりに、しどけない態度なりも目に立たず、繕つくろわぬのが美しい。

「これは憚り、お使い柄恐おそれい入いります。」

と主人は此方こなたに手を伸ばすと、見得もなく、婦人おんなは胸を、はら
んばいになるまでに、ずツと出して差置くのを、畳をずらして受
取つて、火鉢の上でちよつと見たが、端書はがきの用は直ぐに済んだ。
机の上に差置いて、

「ほんとに御苦勞様でした。」

「はいはい、これはまあ、御丁寧な、御挨拶ごあいさつ痛み入りますこと。
お勝手からこちらまで、随分遠方でござんすからねえ。」

「憚り様ね。」

「ちつとも憚り様なことはありません。謹さん、」

「何ね、」

「貴下あなた、その（憚り様ね）を、端書を読む、つなぎに言ってるの

ね。ほほほほ。」

謹さんも莞爾にっこりして、

「お話しなさい。」

「難ありがと有う、」

「さあ、こちらへ。」

「はい、誠にどうも難有う存じます、いいえ、どうぞもう、どうぞ、もう。」

「早速だ、おやおや。」

「大分丁寧でございました。」

「そんな皮肉を言わないで、坊やは？」

「寝ました。」

「母は？」

「行火あんかで、」と云つて、肱ひじを曲げた、雪なす二の腕、担いだように寝て見せる。

「貴女あなたにあまえていゝんでしよう。どうして、元氣な人ですからね、今時行火をしたり、宵の内から転寝うたたねをするような人じゃないの。鉄は居ませんか。」

「女中さんは買物に、お汁みおつけの実を仕入れるのですつて。それから私がお道楽、翌日あしたは田舎料理を達引たてひこうと思つて、ついでにその分も。」

「じゃ階下したは寂さみしいや、お話しなさい。」

お民はそのまま、すらりと敷居へ、後手を弱腰に、引っかけの

端をぎゆうと撫なで、軽かろく衣紋えもんを合わせながら、後姿の襟清く、振返つて入つたあと、欄干てすりの前なる障子を閉めた。

「ここが開あいていちや寒いでしょう。」

「何だかぞくぞくするようね、悪い陽気だ。」

と火鉢を前へ。

「開あツ放しておくからさ。」

「でもお民さん、貴女が居るのに、そこを閉めておくのは気になります。」

時に燈に近う来た。瞼まぶたに颯さつと薄うすくれない紅。

坐すわると炭取を引寄せて、火箸ひばしを取つて俯向うつむいたが、

「お礼に継いで上げましょうね。」

「どうぞ、願います。」

「まあ、人様のものので、義理をするんだよ、こんな呑気のんきツちやありやしない。串じょうたん戲ごはよして、謹こつちさん、東京は炭が高いんですつてね。」

あるじ主人は おおあぐら大胡座で、落着澄まし、

「吝けちなことをお言いなさんな、お民さん、阿母おふくろは行火あんかだというのに、押入には葛籠つづらへ入つて、まだ蚊帳かやがあるという騒さわぎだ。」

「何のそれが騒さわぎなことがあるもんですか。またいつかのように、

夏中蚊帳が無くつては、それこそお家は騒動ですよ。」

「騒動どころか没落だ。いや、弱りましたぜ、一夏は。」

何しろ、家の焼けた年でしょう。あの焼あとというものは、どういうわけだか、恐しく蚊が酷い^{ひど}。まだその騒ぎの無い内、当地^{こちら}で、本郷のね、春木町の裏長屋を借りて、黥間^{なかま}と自炊をしたことがありましたつけが、その時も前の年火事があつたといつて、何年にもない、大変な蚊でしたよ。けれども、それは何^{わか}、少いもの同志だから、萌黄緘^{もえぎおどし}の鎧^{よろい}はなくても、夜^{よつび}一夜、戸外^{おもて}を歩行^{ある}いていたつて、それで事は済みました。

内じゃ、年よりを抱えていましょう。夜が明けても、的^{あて}はないのに、夜中一時二時まで、友達の許^{とこ}へ、苦^{くるし}い時の相談の手紙な

んか書きながら、わきで寝返りなさるから、阿母おつかさん、蚊が居ますかつて聞くんです。

自分の手にや五ツ六ツたかっているのに。」
あるじ 主人は火鉢にかざしながら、

「居ますかもないもんだ。」

ああ、ちつと居るようだの、と何でもないように、言われるんだけれども、なぜ阿母おふくろには居るだろうと、口惜くやしいくらいでね。今に工面してやるから可いい、蚊の畜生覚えていろと、無念むねんこつずい骨髓はげしでしたよ。まだそれよりか、毒虫のぶんぶん矢を射るような烈はげい中に、疲れて、すやすや、……傍わきに私の居るのを嬉しそうに、快よさそうに眠られる時は、なお堪たまらなくって泣きました。」

聞く方が歎息して、

「だつてねえ、よくそれで無事でしたね。」

顔見られたのが不思議なほどの、懐かしそうな言ことばであつた。

「まさか、蚊に喰殺されたという話もない。そんな事より、恐るべきは兵ひょうろう糧りやうでしたな。」

「そうだつてねえ。今じや笑いばなしになつたけれど。」

「余りそうでもありません。しかしまあ、お庇かげ様さま、どうにか蚊帳もありませんから。」

「ほんとに、どんなに辛かつたらう、謹さん、貴下あなた。」と優しい顔。

「何、私より阿母ですよ。」

「伯母さんにも聞きました。伯母さんはまた自分の身がかせになつて、貴下が肩が抜けないし、そうかといつて、修行中で、どう工面の成ろうわけはないのに、一ツ売り二つ売り、一日だてに、段々煙は細くなるし、もう二人が消えるばかりだから、世間体さえ構わないなら、身体からだ一ツないものにして、貴下を自由にしてあげたい、としよつちゆうそう思つていらしたつてね。お互に今聞いても、身ぶるいが出るじゃありませんか。」

と顔を上げて目を合わせる、兩人の手は左右から、思わず火鉢をおき压えたのである。

「私はまた私で、何です、なまじ薄うす髯ひげの生えた意気地のない兄あ哥にいがついているから起つて、相応ややくにどうか遺ゆ繰くつて行かれるだ

ろう、と思うから、食物くいものの足りぬ阿母を、世間でも黙って見て
いる。いつそ俸せがれがないものと極きまつたら、たよる処も何にもない。
六十を越した人を、まさか見殺しにはしないだろう。

やっちまおうかと、日に幾度いくたび考えたかね。

民さんも知っていますよう、あの年は、城の濠ほりで、大層投身者みなげ
がありました。」

同一年おないとしの、あいやは、姉さんのような領うなずき方。

「ああ。」

「確か六七人もあつたでしょう。」

お民は聞いて、火鉢のふちに、算盤そろばんを弾はじくように、指を反らして、

「謹さん、もっとですよ。八月十日の新聞までに、八人だつたわ。」

と仰いで目を細うして言った。幼い時から、記憶の鋭い婦人である。

「じゃ、九人になる処あなだつた。貴女あなたの内へ遊ゆびに行くと、いつも帰りが遅くなつて、日が暮れちや、あの濠端ほりばたを通つたんですが、ね、石垣あおが蒼あおく光つて、真ま黒くろな水の上から、むらむらと白い煙が、こつちに這はいかかつて来るように見えるじやありませんか。

引込まれては大変だと、早足に歩ある行き出すと、何だかうしろから追い駈かけるようだから、一心に遁にげ出してさ、坂の上で振返ると、凄すごいような月で。

ああ、春の末でした。

あとについて来たものは、自分の影法師ばかりなんです。

自分の影を、死神と間違えるんだもの、御覧なさい、生きている瀬はなかつたんですよ。」

「心細いじやありませんか、ねえ。」

と寂さみしそうに打傾おもてく、面に映うつつて、頸うなじをかけ、黒くろ縷ろ子の襟じゆすに

障子の影、薄うすら蒼あざく見えるまで、戸外おもては月の冴さえたる気勢けはい。カラ

カラと小刻こきざみに、女の通る下駄の音、屋敷町に響こいたが、女中は

まだ帰って来ない。

「心細いのが通り越して、気が変になっていたんです。

じゃ、そんな、気味の悪い、物凄いい、死神のさそうような、厭いやな濠端を、何の、お民さん。通らずともあるの事だけれど、なぜかまた、わざとにも、そこを歩行あるいて、行過ゆきすぎてしまつてから、まだ死なないでいるつて事を、自分で確たしかめて見たくてならんのでしたよ。

危けん険のんせんぼん 千万。

だって、今だから話すんだけど、その蚊帳かやなしで、蚊が居るツつていう始末でしょう。無いものは活計たつきの代しろという訳で。

内で熟じっとしていたんじゃ、たとい曳ひくにしろ、車も曳けない理

窟ですから、何がなし、戸外へ出て、足駄穿きで駄け歩行くしだらだけれど、さて出ようとする、気になるから、上り框へ腰を掛けて、片足履物をぶら下げながら、母さん、お米は？ ツて聞くんです。」

「お米は？ ツてね、謹さん。」

と、お民はほろりとしたのである。あるじはあえて莞爾やかに、「恐しいもんだ、その癖面は何升どこは、この節かえつて覚えませんでした。その頃は、まったくです、無い事は無いにしろ、幾許するか知らなかった。」

皆、親のお庇だね。

その阿母が、そうやって、お米は？ ツて尋ねると、晩まで

あるよ、とお言いなさる。

あす翌日のが無いと言われるより、どんなに辛かったか知れません。

お民さん。」

と呼びかけて、もとより答を待つにあらず。

「もう、その度にね、私はね、腰かけた足も、足駄の上で、何だつて、こう脊が高いだろう、と土間へ、へたへたと坐すわりたかつた。」

「まあ、貴下あなた、大抵じゃなかつたのねえ。」

フトその時、火鉢のふちで指が触れた。右の腕かいなはつけ元まで、

二人は、はっと熱かったが、思わず言い合わせたかのごとく、鉄瓶に当って見た。左の手は、ひやりとした。

「謹さん、沸わかしまししょうかね。」と軽かろくいう。

「すっかり忘れていた、お庇さまで火もよく起つたのに。」

「お湯があるかしら。」

と引つ立てて、蓋ふたを取つて、燈あかりの方に傾けながら、

「貴下。ちよいと、その水差しを。お道具は揃つたけれど、何だかこの二階の工合が下宿のようじゃありませんか。」

四

「それでもね、」

とあるじは若々しいものいいで、

「お民さんが来てから、何となく勝手が違つて、ちよつと他所よそから歸つて来ても、何だか自分の内うちのようじゃないんですよ。」

「あら、」

とて清すずしい目を睜みはり、鉄瓶の下したに両手を揃そろえて、真直まっすぐに当りながら、

「そんな事を言うもんじゃありません。外とへといつては、それこそ田舎の芝居一つ、めつたに見みに出た事こともないのに、はるばる一人旅ひとりで逢あいに來たんじやありませんか、酷ひどいよ、謹つつしさんは。」
と美しく打怨うちえんずる。

「飛んだ事を、はははは。」

とあるじも火かに翳かげして、

「そんな気でいった、内らしくないではない、その下宿屋らしくないと言ったんですよ。」

「ですからね、早くおもらいなさいまし、悪いことはいけません。どんなに気がついて、しんせつでも、女中じや推切おしきつて、何かすることが出来ませんからね、どうしても手が届かないがちになるんです。伯母さんも、もう今じや、蚊帳よりお嫁ほしが欲しいんですよ。」

あるじは、屹きつと頭かぶりを掉ふつた。

「いいえ、よします。」

「なぜですね、謹さん。」と見上げた目に、あえて疑うたがの色はなく、別に心あつて映つたのであつた。

「なぜという議論になります。ただね、私は欲くないんです。

こういえば、理窟もつけよう、またどうこうというけれどね、

年よりのためにも他人の交まじらない方が気楽で可いいかも知れませんが、

お民さん、貴女あなたがこうやって遊びに来てくれたって、知らない婦お

人んなが居なようより、阿母おふくろと私ばかりの方が、御馳走ごちそうは届かないに

した処で、水入らずで、気が置けなくって可いじやありませんか

。」

「だって、謹さん、私がこうして居いいたために、一生貴方あなた、奥さ

んを持たないでいられますか。それも、五年と十年と、このまま

で居いたいって、こちらに居いられます身体からだじやなし、もう二週間

の上になつたって、五日目ぐらいから、やいやい帰かえって、言いつ

て来て、三度めに来た手紙なんぞの様子じゃ、良人やどの方の親類が、ああ、このつて、面倒だから、それにつけても早々帰れじゃありませんか。また貴下あなたを置いて、他に私ほかの身についた縁者といつてはないんですからね。どうせ帰れば近所近辺、一門一類が寄つて集つて、」

と婀娜あだに唇の端を上げると、顰ひそめた眉を掠かすめて落ちた、鬢びんの毛を、焦じれつたそうに、背うしろへ投なげて搔かきあ上げつつ、

「この髪を撈むしりたくなるような思いをさせられるに極きまつてるけれど、東京へ来たら、生意氣らしい、気の大きくなつた上、二寸切られるつもりになつて、度胸を極きめて、伯母おばさんには内証ないしよですがね、これでも自分で呆あきれるほど、了りようけん簡かんが据すわつていますけれ

ど、だってそうは御厄介になつても居られませんもの。」

「いつまでも居て下さいよ。もう、私は、女房なんぞ持とうより、貴女に遊んでいてもらう方が、どんなに可いから知れやしない。」

と我^{わがまま}儘らしく熱心に言った。

お民は言^{ことば}を途切らしつ、鉄瓶はやや音^ねに出づる。

「謹さん、」

「ええ、」

お民は唾^つをのみ、

「ほんとうですか。」

「ほんとうですとも、まったくですよ。」

「ほんとうに、謹さん。」

「お民さんは、嘘だと思つて。」

「じゃもういつそ。」

と烈はげしく火箸ひばしを灰について、

「帰らないでおきましようか。」

五

我を忘れてお民は一氣に、思い切つていいかけた、言ことばの下に、あわれ水ならぬ灰にさえ、かず書くよりも果敢はかなげに、しょんぼり肩を落したが、急に寂さみしい笑顔を上げた。

「ほほほほ、その氣で沢山たんと御馳走をして下さいまし。お茶ばか

りじや私は厭。^{いや}」

といううち涙さしぐみぬ。

「謹さん、」

というも曇り声に、

「も、貴下、^{あなた} どうして、そんなに、^{やさし} 優しくって下さるんですよ。

こうした私じやありませんか。」

「貴女でなくツて、お民さん、貴女は大恩人なんだもの。」

「ええ？ 恩人ですつて、私が。」

「貴女が、」

「まあ！ 誰方^{どなた}のねえ？」

「私のですとも。」

「どうして、謹さん、私はこんなぞんざいだし、もう十七の年に、何にも知らないで児持こもちになったんですもの。碌ろくに小袖こそで一つ仕立たてつて上げた事はなく、貴下あなたが一生の大切だいじだった、そのお米のなかつた時も、煙草たばこも買かつてあげないでさ。

後で聞いて口惜くやしくつて、今でも怨うらんでいるけれど、内証うちしやうの苦しい事ことしたら、ちつとも伯母おばさんは聞きかして下くださらないし、あなたあなたの御容ごようす子こでも分わりそうなものだったのに、私が気がつかないからでしょうけれど、いつお目にかかっても、元氣げんきよく、いきいきしてねえ、まったくですよ、今なんぞより、窶やつれてないで、もつと顔色かほいろも可よかったもの……」

「それです、それですよ、お民さん。その顔色の可よかったのも、

元気よく活いきいき々いきいきしていたのだから、貴女、貴女の傍そばに居る時の他ほかに、そうした事を見た事はありませんまい。

私はもう、影法師が死神に見えた時でも、貴女に逢えば、元気が出て、心が活々したんです。それだから貴女はついで、ふさいだ、陰気な、私の屈託顔を見た事はないんです。

ねえ。

先刻さつきもいう通り、私の死んでしまった方が阿母おふくろのために都合よく、人が世話をしようと思ったほどで、またそれに違いはなかったんですもの。

実際私は、貴女のために活いきていたんだ。

そして、お民さん。」

あるじが落着いて静しずかにいうのを、お民は激しく聞くのであろう、潔白なるその顔かんばせに、湧わきのほ上あるごとき血汐ちしおの色。

「切迫せつぱつま詰まつて、いぎ、と首の座に押直る時には、たとい場処ところが離れていても、きつと貴女の姿が来て、私を助けてくれるツて事を、堅くね、心の底たしかに、確たしかに信仰たしかしていたんだね。

まあ、お民とこさん許よふかで夜更よふかしして、じや、おやすみつてお宅を出る。遅い時は寝衣ねまきのなりで、寒いのも厭いとわないで、貴女いとが自分で送かどつて下さる。

門かどを出ると、あの曲角あたりまで、貴女、その寝衣のまま、暗やみの中まで見送かどつてくれたでしょう。小児こどもが奥で泣ないている時ときでも、雨が降ふっている時ときでも、ずツと背中まで外へ出して。

私はまた、曲り角で、きつと、密と立停^{そつたちど}まって、しばらく経^たつて、カタリと柩^{くるる}のおりるのを聞いたんです。

その、帰り途^{みち}に、濠端^{ほりばた}を通るんです。柩は下りて、貴女の寝た事は知りながら、今にも濠へ、飛込もうとして、この片足が崖^{がけ}をはずれる、背後^{うしろ}でしつかりと引き留めて、何をするの、謹さんと貴女がきつという^{たしか}と確に思つた。

ですから、死のうと思ひ、助かりたい、と考えながら、そんな、厭^{いや}な、恐ろしい濠端を通つたのも、柩をおろして寝なすつた、貴女が必ず助けてくれると、それを力にしたんです。お庇^{かげ}で生きていたんですもの、恩人でなくツてき、貴女は命の親なんですよ。」

とただ懐かしげに嬉しそうにいう顔を、じつと見る見る、もの

をもういわず、お民ははらはらと、薄曇る燈ともしびの前に落涙した。

「お民さん、」

「謹さん、」

とばかり齒をカチリと、堰せきあえぬ涙を嚙かみ留めつつ、

「口についていうようでおかしいんですが、私もやっぱり。貴下は、もう、今じゃこんなにおなりですから、私は要らなくなつたでしょうが、私は今も、今だって、その時分から、何ですよ、同おんなじなんです、謹さん。慾よくにも、我慢にも、厭で厭で、厭で厭で死にたくなる時がありますとね、そうすると、貴下が来て、お留めなさると思つてね、それを便りにしていますよ。

まあ、同じようでも不思議だから、これから別れて帰りましたら、

私もまた、月夜にお濠端を歩ある行きましたよう。そして貴下、謹さんのお姿が、そこへ出るのを見ましようよ。」

と差さ俯しう向つむいた肩が震えた。

あるじは、思わず、火鉢なりに擦り寄って、

「飛んだ事を、申しやう戯だんじゃありません、そ、そ、そんな事をい

つて、讓ゆず（小児の名）さんをどうします。」

「だって、だって、貴下がその年、その思いをしているのに、私
はあの児こを拵こしらえました。そんな、そんな児を構うものか。」

とすねたように鋭くいったが、露を湛たえた花はな片びらを、湯気やな
ぶると、笑えみを湛たえ、

「ようござんすよ。私はお濠たのしを楽しみにしますから。でも、こんな

じゃ、私の影じゃ、^{すご}凄^い死神なら可^いいけれど、大方^{いたち}鼬^にでも見え
るでしょう。」

と投げたように、片身を畳に、^{つま}褌も乱れて崩折^{くずお}れた。

あるじは、ひたと寄せて、^{おさ}押^さえるように、^す棄^てた女の手を取っ
て、

「お民さん。」

「……………」

「国へ、国へ帰しやしないから。」

「あれ、お待ちなさい伯母さんが。」

「どうした、どうしたよ。」

という母の声、下に聞えて、わつとばかり、その譲という児が。

「煩うるせいねえ！ちよいと、見て来ますからね、謹つつしさん。」

とはらりと立つて、脛はぎ白しろき、敷居際しきいの立姿たちすがた。やがてトントンと階下したへ下りたが、泣なき留やまぬ讓ゆるを横抱よこかかきに、しばらくして品のいい、母親ははの形なりで座まに返かえった。燈火とうかの陰かげに胸むねの色いろ、雪ゆきのごとく清きらかに、讓ゆるはちゆうちゆうと乳ちちを吸すって、片手ひとてで絶すつて泣ないじやくる。

あるじは、きちんと坐すわり直ただって、

「どうしたの、酷ひどく怯おびえたようだっけ。」

「夢ゆめを見たかい、坊ぼくや、どうしたのだねえ。」

と頬ほに顔かほをかさぬれば、乳ちちを含こみつつ、愛あいらしい、大きな目をくるくるとやって、

「鼬が、阿母さん。」

「ええ、」

二人は顔を見合わせた。

あるじは、居寄つて顔を覗き、ことさらに打笑い、

「何、内へ鼬なんぞ出るものか。坊や、鼠の音を聞いたんだろう

。」

小児はなお含んだまま、いたいけに捻向いて、

「ううむ、内じやないの。お濠ン許で、長い尻尾で、あの、目が

光つて、私、私を睨んで、恐かつたの。」

と、くるりと向いて、ひつたり母親のその柔かな胸に額を埋め

た。

また顔を見合わせたが、今はその色も変らなかつた。

「おお、そうかい、夢なんですよ。」

「恐かつたな、恐かつたな、坊や。」

「恐かつたね。」

からからと格子が開いて、

「どうも、おそなわりました。」と勝手にいって、女中が帰る。

「さあ、御馳走だよ。」

と衝と立ったが、早急さつきゆうだったのと、抱いた重量おもみで、裳もすそを前

に、よろよると、お民は、よろけながら段階だんばしご子。

「謹さん。」

「……………」

「翌朝あしたのお米は？」

と艶麗はでやかに莞爾にっこりして、

「早く、奥さんを持って下さいよ。ああ、女中さん御苦勞でした

」。

と下を向いて高く言つた。

その時襖ふすまの開く音がして、

「おそなわりました、御新造様ごしんぞさま。」

お民は答えず、ほと吐息。円鬚艶まげつややかに二三段、片頬かたほを見せて、

差覗さしのぞいて、

「ここは閉めないで行きますよ。」

明治三十八（一九〇五）年六月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年10月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第九卷」岩波書店

1942（昭和17）年3月30日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：今井忠夫

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

女客

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>